

明和電機による審査員講評動画 ▶

「あ、そうか」と。圧縮された作品をこの箱から出したときの驚き、つまり「創意工夫」、まずそれが一番大事だと思い、それを基準にしました。ふつう、展覧会の審査の場合は、「芸術性があるか」ということが第一基準になると思いますが、今回はその前に、箱を開けたときに度肝を抜かれたかとか、その「創意工夫」を第一基準にしました。そのあとに、「芸術性があるか」という順番でもう一度作品を見ていきました。そうすることで、今回の賞を決めました。



審査員

明和電機

出品数141点

審査員講評
自分で出したテーマでしたが、ここまでパラエティイアふれる作品が集まるとは思ってもみませんでした。まず、会場にどどと並んでいる作品を見たときにどういう気持ちになったかという、「気持ち悪く」なりました(良い意味で)。どういことかという、ふつう、作品をつくる際には、キャンバスでも木彫でも石膏でも、等身大とか等倍といった、自分が情念をぶつけられるサイズのものに向かって、芸術家は表現をしていきます。しかし、今回は「ポスト投函サイズ」という小さいサイズだったので、そのぶつける情念を、みなさんは一度この「ポスト投函サイズ」にぎゅっと圧縮しているんです。それが会場で解凍されているため、なんだか人の手紙を読んでいるような、人の内面をもろに見ているような気持ちになりました。それをとらえて気持ち悪くなったのです。そこでスタバに行ってコーヒーを飲みました。そのあと、冷静になって、もう一回作品を見ました。どうやってこのパラエティイアふれる作品群の中から受賞作を選ぼうかなと思ったときに、ふと、そこに送られてきた「ポスト投函サイズ」の箱があるのが目に入りました。



アートパレード大賞
(熊本市賞)

ながたあさみ《(うろ覚え)思い出の上通》
絵巻物のような作品に描かれているのは、熊本市現代美術館近くの商店街。地元に近いテーマが選ばれています。とにかく要素が詰まっていて、見ていてとても楽しい絵巻物です。おもしろいのは、この約6mの絵巻物、ちゃんと額装して「ポスト投函サイズ」に入れようとするとうるわけがない。そこで、透明なフィルムを手縫いで縫って、その中に収める額を自作されています。また、絵にピンがあたりない額装風に展示できるようにしている。そういった細やかな創意工夫があります。度肝を抜かれるおもしろさと、そこに描かれている楽しさがあり、アートパレード大賞に選ばれました。



(作品部分)

オーディエンス賞同時受賞!

※オーディエンス賞は来場者の投票により選出される賞です。

審査員特別賞

(明和電機賞)

平田雪乃《ソーシャルディスタンス》
素朴ですが、よく考えるとすごくおもしろい作品です。いまはソーシャルディスタンスの時代で、人と人との間の仕切りがあちこちに立っています。この作品も、四人の家族と思われ人たちが仕切りで区切られていますが、ドローンのような俯瞰の視点で見ると全然区切られていません。それぞれ楽しそうな四人が見える。そして、それを効果的に表現するのに、この方は紙をお皿のように折っています。絵画のような平面だとお互いが向き合っている感じができません。ちょっと折ることによって、一家団らんのようになり、ディスタンスを打ち消しています。これは発明ではないかと思えます。



vol. 95
AUTUMN
アートキッスレター

井手宣通賞



横山陸渡《愛犬 ひなた》
紙をつなげた大きい絵は出品されるとは思っていました。その中でもこの作品は、一つのゆかいなテーマでドン!と描いている。おもしろいのは、A4の紙をつなげることがテキストチャーになっているところ。大きい絵のインパクトと、紙をつなげたモザイクのようなテキストチャーの相まった感じが非常におもしろい作品です。

熊本市現代美術館賞



牛島 漁《嘯吹》
「ポスト投函サイズ」は彫刻をつくる方には厳しいテーマだと思いましたが、そこを見事にクリアして顔の焼き物を送ってきた方がいます。この作品はブロックになっていて、まさかこの顔のサイズが「ポスト投函サイズ」の箱から出てくるとは思えない、おもしろい組み方でつくられています。これは度肝を抜かれました。顔もとてもいい顔をしています。

出田均《炎屋》
もともと日本は色紙といった小さい絵の文化がとても発達しているので、小さい絵を描かれた方はたくさんいました。この作品はそれに加えて、テトリスのような額が折れたまゝと「ポスト投函サイズ」になる。そして展開するとアイコンのような形になる。その形も考えてちゃんと描かれているところがおもしろい。



Horizaki《春》
この作品は「ポスト投函サイズ」の箱から取り出すと、一見すると「ただ「春」と描かれているだけか」と思えます。しかし、よく見ると、ものすごく細かいドローイングでできていて、びっくりします。その宇宙に引き込んでいく感じがお見事。



優秀賞



西生美顕《Stay Home》
いま ZINE (手作りの本) が流行っていますが、この作品は一冊の強大な ZINE のようです。一枚一枚が大きい雑誌をビリビリ破って詰め込んだような、コラージュのおもしろさがあります。ドローイングも上手くて、味わいのある絵です。これが家に届いて、箱を開けるとおもしろい絵がどんどん出てくると楽しいだろうなと思いました。

佐伯彰彦《orbital period》
いまは CD の時代ではないので、音楽はサブスクで携帯を使って聴くように変わっています。しかし、あえてこの方は CD を選び、CD のような自分が描いた円盤の作品をプリントアウトしたものと、詩的なテーマの内容の音楽を組み合わせ、インスタレーションができるように作品をつくっています。心がピリッとするような感じが好きです。



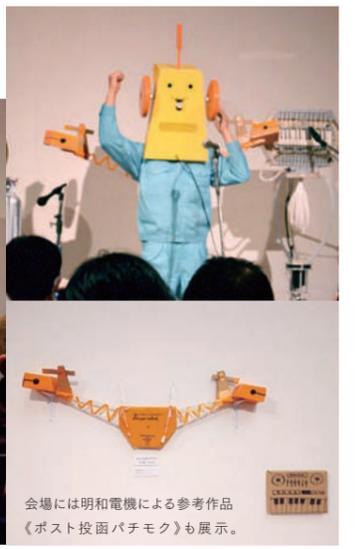
福山裕教《十五の壁》
LED をつけた現代美術作品は昔からたくさんあります。社会的メッセージといったことが書かれていることが多いですが、この方は、自分の子どもとの葛藤、行き場のないモヤッとしたものを言葉にして表しています。そのなんともいえないモヤモヤ感が、LED のピカピカ感と残像と合体して、効果をあげています。



熊本アートパレード 入賞作品と審査員講評



初日の 9/26 (土) には、開幕イベントとして明和電機によるミニライブを会場で開催。ナンセンスマシンを駆使した愉快的パフォーマンスに、会場は盛り上がりを見せていました。



会場には明和電機による参考作品《ポスト投函パチモク》も展示。

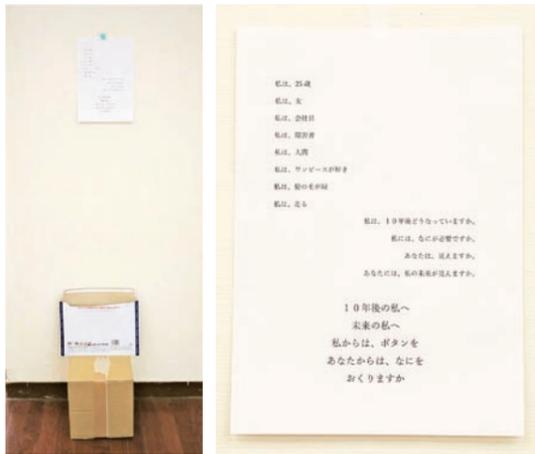


このサイズに収まるのが今回の出品条件!

奨励賞

坂口美果《あなたから 10年後の私へ》

「ポスト投函サイズ」の作品は、実は現代美術の手法でもよく登場する手紙のアート(メールアート)です。その要素をコンセプチュアルにつかって、誰か送ってくるかなと思いましたが、こちらが唯一でした。未来の自分に対しての手紙を送る。そして箱の展示方法についても指示がある。稚拙ではありますが、見事にコンセプチュアルな作品です。



kou《軽甲冑》

服を折り畳めば確かに小さくなるものなので、服をテーマにした作品がいくつかありましたが、これはもうひと工夫あった作品です。鎧をやわらかいブルーシートで使うような素材でつくっています。その素材とパターンとの意外性がユニーク。



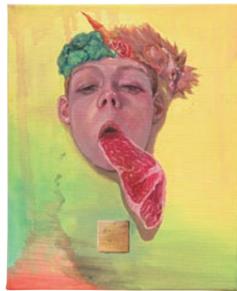
片山千鶴子《「眠っていませんか?」》

マルセル・デュシャンが始めた「レディメイド」という、既にある工業製品の意味を右から左にちょっと動かすだけで「なにこれ?」となる芸術作品があります。この作品も傘を二つ合体しただけでオブジェになっています。使い道としては買える物袋ですが、展示しているさまは、ちゃんと立体作品になっていておもしろいと思いました。



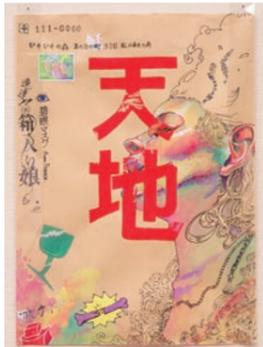
亀井純子

《時のしおり〜生きのこった私 生きぬくエンパワーマイネーム》
作品というものはその人の情念がガツ!と出ますが、まさにそれが「ポスト投函サイズ」の中に、たっぷりぎゅぎゅに詰まった圧縮率の高い作品です。床に展示された作品を見るとわかりますが、ほとぼしるエネルギーが伝わってきます。



耳たぶより少し硬い《様々な JIN men》

「ポスト投函サイズ」というテーマなので、ふつうに考えれば郵便屋さんとか宅急便が作品を届けるところですが、この方はそこをぶちぎって、封筒にまでぎゅぎゅに描き、しっかり切手も貼りつつ、自分で手持ちで届けています。封筒から中身まで全て描ききったという作品です。

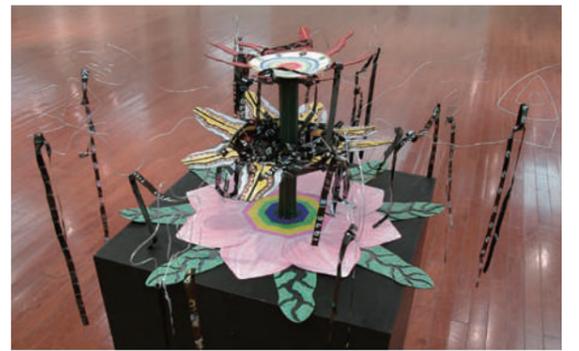


ル・マンド《つい、結んでみたくなる組紐シューレース》

組紐をつくられている方だと思いますが、見せ方がユニークです。靴を紙で作り、マジックで描いて、そこに自分の編んだものをつけています。紐がメインのはずなのに僕は靴の方がおもしろく、なんだかポップな感じで楽しかったです。

高林泰宏《煩惱の花、咲きました》

立体作品を分解して箱の中に詰めてまた再構築する作品は多かったのですが、その中でも、やはりこの作品は情念がドカーンと出ている作品です。自分の中の煩惱を、いろいろなテクスチャーを混ぜ混ぜにして、人生の花にして咲かせている。



イロムラ画工事務所

《たゆたうさんかくは、どこもさしめさない。》
「ポスト投函サイズ」に入る作品は、どれだけ巨大なものができかなというところですが、この作品は出品作の中でも最大級のサイズです。針金でつくっていますが、つなぎ目のところも繊細に工夫してつくられています。



板東俊成

《シュプリーム・ポップ・アディクション!》

たぶん会場の中で一番ムカつく作品だと思います。見ていてムカついて仕方がない。そのムカつきというのは、行き場のないコロナ期の息子と、それをなんで親が撮影しなきゃいけないのかという、どこに向かって何をしたいのかよくわからない感じが、見事に出ています。それを美術館に展示するという事は、親子の問題ではなく、みなさんの問題になるわけです。この息子も、家の中で自分を見るのと、美術館で映し出された自分を見るのでは大違いです。社会実験のように、どうなっていくんだろう?というのが見たくて、奨励賞に選ばれました。



松野郷子《廻る》

この作品は絵画作品ですが、白と黒のコントラストがパキッと出ていて、立体的に組むようにできています。パシッと折りたたむと平面になりますが、ガツと広げると立体作品になります。鉛筆のドローイングもとてもうまい。



フリー部門

「ポスト投函サイズ」作品のほか、フリー部門として例年同様の規格の作品募集を同時に行い、127点のご出品がありました。そこから当館学芸員が「CAMK 奨励賞」5点を選出しました。

CAMK 奨励賞受賞作品

- ▲ 内田満男《思春期・青年期・中高年期の舟 II》
- 岩本ひさみ《令和 2 年はねずみさんとつけみにゃね》
- ◎ 村上憲三《現代石工の魂》
- 大淵裕佳里《白川公園》
- 駒田利子《フチ子さんの季節》

